第45回日本中毒学会総会・学術集会

会　期：2023年7月14日（金）～15日（土）
会　場：さいたまスーパーアリーナ TOIRO
会　長：清田 和也（さいたま赤十字病院 高度救命救急センター）

コーヒーブレイクセミナー

座 長　**中村 謙介** 先生　（横浜市立大学附属病院　集中治療部）

中毒×痙攣のtips ～中毒領域の痙攣診療を極める～

演 者　**中村 謙介** 先生　（横浜市立大学附属病院　集中治療部）

Abstract

救急診療において、痙攣の治療や管理は神経集中治療の観点からも欠かせないものであるが、こと中毒診療において一般の痙攣治療と異なるtipsやpitfallが果たしてあるのだろうか。答えはYesである。救急診療において、未診断の痙攣の鑑別に挙げるべき中毒病態には独特なものがあり、その中には特異的な治療が存在するものがあり、痙攣重積など特に迅速な治療を必要とする場合には鑑別と同時に治療を行う必要があるため、中毒×痙攣の最低限の知識を持って痙攣に対応するべきである。そして何より、中毒に起因する痙攣、中でも痙攣重積に関しては、その治療のコンセプトを一部修正して臨む必要があり、通常と同じような痙攣対応をしていると時に大きなpitfallに落ちることになる。本講演では中毒×痙攣のポイントを整理し、中毒領域独特の痙攣診療のあり方を解説し、明日の中毒及び痙攣双方の診療に活かせるtipsをお伝えしたい。

中毒・代謝疾患の脳波

演 者　**久保田 有一** 先生　（東京女子医科大学附属足立医療センター）

Abstract

救急の現場では、代謝性脳症・中毒による意識障害はしばしば遭遇する病態であり，脳波、特に持続脳波モニタリングは診断と治療判定に有用である。代謝性脳症では，意識障害の程度と関係して，基礎律動・後頭部優位律動の徐波化や消失、時に全般性の間欠的周期性発射や全般性律動性デルタ活動を呈することがある。中毒の脳波では、両側同期性の全般性周期性発射を示すものがある。薬物関連では，炭酸リチウム，テオフィリンなどが挙げられ，セフェピムによる脳症も報告されている。また肝性脳症に特徴的といわれている三相波は、近年の脳波分類においては、全般性周期性発射、全般性律動性デルタ活動に分類されている。また、非けいれん性てんかん重積を合併していることもあり、診断においては、非けいれん性てんかん重積の脳波診断を知っておくべきである。代謝性・中毒性疾患の脳波では、必ずしも診断につながる特異的な所見を示すわけではなく、また治療に直結するものではないが、その所見をみることでその重症度や、治療経過の評価をすることができる。

日 時　**2023年7月15日（土）14:45～15:30**

会 場　**第2会場**（さいたまスーパーアリーナ 4F TOIRO）

共催：第45回日本中毒学会総会・学術集会／日本光電工業株式会社

73SH-00021